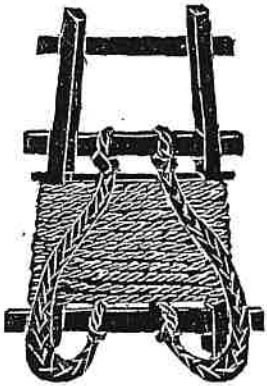
育英生辞令伝達式

「地の塩」「一粒の麦」に…と激励

第七回育英生七人に対する辞令伝達式が去る二月五日、開山十三回忌法要に先立ち釈迦殿で行われた。育英会理事長である黒田方丈の導師で仏祖諷経が営まれた後、宮本延雄理事が新しく決定した育英生五人と、継続採用となった二人の計七人を発表。黒田理事長から一人一人に辞令と育英金が手渡された。

佐藤俊明常任理事は経過報告の中で、語学(日本語)が充分でないために選考から落ちた者がいたことに触れて、「この育英会はもとより国際的な視野に立っているが、一カ寺の事業である

ため、語学の障壁を越えて行うほどにはまだ成長していない」と説明。これまでにアメリカ、タイ、インド、スリランカ、イギリス、フランス、韓国、オランダ、日本の九カ国に三十四人を派遣したと報告した。

この後、育英生への激励を込めて、駒沢大学の鈴木格禅教授が「この事業は、自分の領域にとどまる学問その他の研修だけでなく、人類が今まで継続してきた文化を民族、国境の枠を超えて未来につなげていこうとする誓願が底に力強くあるように思う。従って、それぞれの研鑽を自分の手柄とせず、地の塩としてそれを未来につなげていただきたい。それが皆さんの一番大事な任務であり、当山の黒田老師はじめ多くの方々の願いであるに違いない」と述べた。

また、育英会顧問の伊藤喜三郎総代は「宗教にはいろんな派閥があるが、この事業は宗派に拘わらず立派な人を海外に派遣するという素晴らしいもの。一粒の麦が地球のあちこちに散らばれば、すごい力になる」と激励した。